

## 第3回地球生きもの委員会

### 議事要旨

●開催日時:平成 23 年2月 10 日(木) 16 時 30 分～18 時 00 分

●開催場所:ホテルニューオータニ「翔の間」

#### ■南川事務次官挨拶

・COP10 は国内外から評価された。愛知目標という目標も決まり、ABS についても名古屋議定書として決定。来年にはインドで COP11 が開催されるが、インドからも、日本の役割に期待されている。この地球生きもの委員会にも国連生物多様性の 10 年への積極的な活動をお願いしたい。まずは今後の日本の姿勢を、COP11 のサイドイベント等で発表する機会を作りたい。

#### ■涌井委員長代理挨拶

・委員長からの挨拶の骨子の報告。「本日は国際生物多様性年の成果について、地球生きものプロジェクトのご報告をいただきながら、本委員会の活動を総括したい。国連生物多様性の 10 年に向け、この委員会としての対応をご検討いただきたい。昨年来、本委員を始め、学术界、NGO/NPO、報道機関、自治体、関係省庁など幅広い分野の方々が生物多様性保全の活動に取り組まれるようになった。経済界でも、生物多様性民間参画パートナーシップを設立するなど、新たな取組を開始しており、地球生きもの委員会は多様な主体が集い連携できる場として、大きな可能性を持っている。今後さらに生物多様性の問題解決に向けて、この委員会が主導的に役割を発揮できるよう、本日は皆様のお知恵を拝借したい。」

・12 月 18 日に石川県・金沢市のご尽力により、国際生物多様性年のクロージングイベント及び国際森林年のブリッジングイベントが開催され成功をおさめた。COP10 支援実行委員会はポスト COP10 フォーラムを開催し、ある中学生からの「おじさんたちは自分たちの問題だと考えているのかもしれないが、私は愛知目標のそのものを生きていく。だから真剣に我々の将来を考えてほしい」というメッセージを通して子どもたちの熱い思いを感じた。支援実行委員会はこの 3 月で解散の方向だが、今後 10 年間、どうやって我々が継承していくのかということが重要。

#### ■議題1 国際生物多様性年の成果について

・2 月 1 日現在で 31 件の地球生きものプロジェクトがあったが、8 月 10 日以降の件について各主体から報告。  
(※資料 1-1 について)

#### ○堂本委員からの報告

・「映像化プロジェクト」は 5 月 22 日の生物多様性の日に BS-TBS で1時間放送することが第一の目的だったが、その後、概要版や英語版の要望にも対応し、非常に多角的な展開となった。DVD 約 500 本を NGO や大学、自治体、企業にも配布。英語版は COP10 期間中、成田空港や関西国際空港のロビーでも上映され、名古屋では環境省や IUCN、生物多様性ジャパンのブースでも期間中上映した。全国の小中学生にも配布しているところ。

・「文化と生物多様性」の冊子は、里山は日本の歴史そのもの、文化だということを紹介するパンフレット。岩槻委員が里山と日本文化の話、イルカ委員が絵本と詩を、私がジェンダーのことを書いた。1500部の日本語版は COP10 期間中に配布。一番こだわったのは人と自然の共生で、「共生」という言葉を「Harmonious coexistence between human and nature」という英語に翻訳した点。COP10 支援実行委員会実施の「絵画・写真コンテスト」応募作品も使用。

#### ○イルカ委員からの報告

・IUCN の親善大使として、2008 年から、COP10 に向けて生物多様性を一般の人々にアピールする活動をしてきた。昨年は、名古屋だけでなく、静岡、山梨、岡山でも COP10 のためのコンサートを行い、他のミュージシャンにも参加してもらった。そこでは大臣のメッセージや CBD を説明したチラシも配布。作品を通じての活動としては、アルバム「森羅万象」、小さい子どもたちのために「まあるいいのち」という絵本を出版した。特に名古屋のコンサートではチケットが即日完売したことで、音楽業界にも、自然環境に対する関心が一般のお客様にアピールできるものなのだという認識を与えることができた。また、地元からの要望もあり、さらに広い会場でコンサートを 7 月、9 月、10 月に行う予定。IUCN からの希望としては、国内やアジアなどで活動していきたいので活動資金などの支援をお願いしたい。幅広い世代に生物多様性をいろいろな場で作品を通じて伝えていきたい。

#### ○COP10 支援実行委員会からの報告

・「絵画・写真コンテスト」は昨年の 6 月から 9 月にかけて募集し、表彰式を 10 月 9 日に COP10 開催に先駆けて行った。応募は全部で 1668 点、絵画が 975 点、写真が 693 点だった。入賞作品を絵画 21 点、写真 22 点選び、COP10 情報発信ステーションのオープニングで表彰式を行った。

#### ○生物多様性条約市民ネットワークからの報告

・「地球のことはみんなで語り合おう」は、一般メディア Yahoo! JAPAN や環境 goo のコンテンツを市民ネットワークが提供するという形で特集ページを作った。また、コミュニティサイトを使い、「アイ・ダイアログ」として一般市民の声を吸い上げた。その集まった声を開催地住民からのメッセージとして、COP10 開催中に記者会見して発信。また、生物多様性自分条約では、例えば、音楽アーティストのメッセージを Yahoo! JAPAN に載せ、ホームページに誘導し、多くの市民の方々の声を集め、ツイッターで展開し、インターネットメディアを活用した多くの人に波及するような市民活動を展開した。

・「生物多様性グローバル対話フォーラム」は COP10 の開催中、名古屋学院大学のフォーラム会場を使い、10 日間さまざまなテーマで市民フォーラムを行った。1 回約 150 名の参加があり、全体で約 1500 人が参加した。先住民族の声を集めたり、COP10 開催中に上関や辺野古の問題などの議論があったのでホットスポットターズという名で開発について対話する市民イベントなどを行った。

#### ○IUCN-Jからの報告

・「想いでつなごう！ COP10 おりがみプロジェクト」は、折り紙を使って COP10 会場を盛り上げ、人々の想いをつなぎ、生物多様性を大切にすきかけを作るというプロジェクト。COP10 開催前からサポーター養成ワークショップを開催し、期間中には折り紙イベントも行い、全部で 10700 の折り紙を集めた。COP10 後、集まった折り紙を東山動植物園の花畑にタイムカプセルとして埋めた。今後も継続予定。他に、「COP10 スペシャル

企画『動物園水族館 30 ヲ所いきものインターネット中継』を実施。

・2020 年までの目標を達成していくための新たな活動として、引き続きプログラムを展開していく。

#### ○自然公園財団からの報告

・「国際生物多様性年ブックカバー配布プロジェクト」は 9～10 月に名古屋と東京でジュンク堂とタイアップして、動物の親子をテーマとした写真や COP10、国際生物多様性の説明が入ったブックカバーを作成し、新書版の本を買った人に数十万枚配った。

#### ○愛知県からの報告

・「COP10 にむけた市町村リレー植樹」は 13 の市町村が COP10 まで植樹をリレーでつなぎ、延べ 1 万 2300 本、約 4 千人が参加した。

・「あいちいきものキャラバン隊」は、県内の失業者を雇用促進として雇い、COP10 の PR を行った。5 万 5 千人が参加。

・「小さなもりを守り隊」は、幼稚園・保育園を中心に登録制度を設け植樹等活動結果を大会で発表する催しを行うとともに、Web で報告を行ってもらっている。50 園、約 5 千人が参加。

・「生物多様性親子セミナー」は、県の 6 つの地方機関が、延べ 45 回、2 千人参加の親子セミナーを行った。

・「地球のいのち・交流ステーション」はモリコロパークで COP10 開催期間中に 154 ブース、26 のステージパフォーマンスを繰り広げた。

・「COP10『あいちのいのちいただき隊』生物多様性クッキング」は、食材を切り口にした啓発事業で、前年からのキャラバンセミナーの集大成として催し、計 5 日実施、約 700 人が参加。

#### ○石川県からの報告

・ 4 件のプロジェクトを実施。7 月から「白山のいのちつないでいこう」という企画展、8 月には毎年やっている環境フェアと併設して「いしかわの里山里海展」を行い、2 万人を超える県民が訪れた。10 月には「いしかわの里山里海 生物多様性シンポジウム」を開催し、12 月に国際生物多様性年クロージングイベントを行って 29 カ国、400 人が参加。1 年にわたって生物多様性の主流化に向けた取組を進めた。

#### ○環境省からの報告

・「生物多様性みどり賞」はイオン環境財団が主体だが、実行委員会に環境省が入っている。生物多様性に関わるさまざまな分野で活躍している人々に国際賞を COP10 の開催期間中に贈呈した。

#### ○小管委員からの報告

・動物を通して生き物の多様性の重要性を伝えてきた。名古屋では 7 つの大学と朝日新聞のイベントで、動物園からみた生物多様性という話をした。最近では、生物多様性の意味をわかりやすく話してほしいという講演依頼がととも増えた。

#### ○水と緑の惑星機構からの報告

・「第 1 回いきものにぎわい企業活動コンテスト」の表彰式を 6 月に実施。その後、コンテストの成果をまとめたパンフレットを作成し、受賞した 12 企業の生物多様性に関する取組を日・英で紹介した。

○地球生きもの委員会による事業報告

- ・水と緑の惑星機構から事業報告(資料 1-3 説明)

○COP10 支援実行委員会の今後について説明があった。

- ・2月1日に最後の委員会総会を開催し、3月31日での解散を決議。3年弱に及ぶ活動には終止符を打つが、構成団体である愛知県、名古屋市は引き続き本会議へ出席する予定であるし、経済団体についてもCOP10を契機に今後も地元で積極的に取り組むものとする。

○以上の報告に対し、環境省より総括と今後の課題が示された。

- ・国際生物多様性年を通じて、いろいろな活動が活発化し、COP10 期間中、自治体、産業界、学術、政治レベルの集まりや会議が活発に行われた。国際自治体会議では国内 129 の自治体が参加し、海外からも 50 以上の自治体が集まった。国内における自治体の盛り上がりや国連生物多様性の 10 年に向けて、大きな力へと発展させることも重要な課題。ビジネス対話会合も行われたが、経済界が中心になって立ち上げた民間参画パートナーシップには既に 400 以上の事業者が入り、生物多様性のための取組を始めている。こうしたさまざまなセクターの活動を国連生物多様性の 10 年につないでいけたらと思う。

■議題2 国連生物多様性の 10 年に向けた対応について

○委員長代理より、事務局の説明を補足。以下の通り。

- ・地球生きもの委員会という名称を前提に、国連生物多様性の 10 年に対応した委員会へと改組しようとする提案であり、事前に委員長からもご賛同いただいた。
- ・2020 年までに COP が計 5 回開かれる。2012 年はインドで COP11、2012 年はリオ+20、2014 年には国別の報告書を出すことになっており、ESD の終了年でもある。2015 年は名古屋プロトコルの施行が開始され、10 年の折々に目標や成果を世界と交流しなければならない。
- ・そこでは NGO/NPO や企業、そして自治体が大きなエンジンとならなければいけない。生物多様性の議論は優れてグローバルな問題であるが同時にローカルな取組が重要。各ステークホルダーがこの委員会をプラットフォームにするという提案は最も適切だと思う。

○10 年委員会の名称について提案があり、それについて事務局との意見交換があった。

- ・「生物多様性」という言葉に対する国民の認識を考える必要がある。愛知ターゲットの目標の 1 番は人々が生物多様性のことを認識し行動・理解すること。これを目指す委員会として、「地球生きもの」という言葉が生物多様性を正しく伝えているのかを議論する必要がある。今までは生き物を入りに生物多様性に対する理解を深めていったが、COP10 を契機に、生活基盤そのものであると理解され始めている可能性があり、「生物多様性」を使うのも一つの方法。

→資料 2-2 では正式名称は「国連生物多様性の 10 年国内委員会」としている。一般の方々には生物多様性という言葉は馴染みが薄いため、通称として「地球生きもの委員会」を使っている。昨年の流行語大賞で「生物多様性」とともに「地球生きもの会議」もノミネートされた。1 年間の活動が定着してきたので、事務局としては、通称として使っていきたい。(事務局)

- ・本件はそういう意見があったということも前提に検討したい。(委員長代理)

○資料 2-2 の図をもとに、委員会の枠組みに必要な要素についての意見交換があった。

・セクターの中に学界が欠けているが。

→資料 2-2 の図に学术界と記載。そこに URBIO(生物多様性と都市)と、まだ立ち上がっていないが、科学と政策をつなげるプラットフォームである「IPBES」を位置づけている。(事務局)

・この図における名古屋議定書の位置づけは。

→議定書の批准は、国が実施しなければいけないので関係省庁の取組となる。経済界など関係するセクターにも関わると認識している。(事務局)

・どこかに ABS という言葉を入れてほしい。これから交渉が本格化すると思うが、薬品や植物など日常生活にも関係することもある。生物多様性条約は 20 年の間に経済条約的側面をもったので、どこかにそれを位置づけるべき。

・途上国との関係などを考えると、どこかに入っていた方がいい。(委員長代理)

→この図を工夫して入れたい。(事務局)

・図の愛知目標が入っている枠の中に、ABS とカルタヘナを入れればいいのか。

・前回の幹事会資料では CEPA が入っていたが、今回は無くなっている。国家・地域・世界規模で CEPA 活動のための窓口・実行組織を設けるということも決まっている。したがってこの委員会は、当然、普及啓発、環境教育という視点が重要である。CEPA はまさに Communication、Education、Public Awareness であり、それも記載いただけるとありがたい。

○関連して、学术界の役割についての意見のやりとりがあった。

・残念ながら、学界が一つのエンジンとして足りていない。(委員長代理)

→学界はそれぞれ目指すテーマが違うので一つになるのが難しかったが、さまざまな学界と NGO/NPO を含めた市民が対話する会合も開かれた。生物多様性というテーマでかなり多くの学界が関心を持って議論したのは大きな成果。10 年に向けて、どう広げていくかは重要な課題。(事務局)

・環境省の円卓会議に関連学界が参加し、意見交換と情報共有ができた。URBIO は都市と生物多様性、City Biodiversity Index の議論を重ねており、学界と国連大学が取り組んだという事実がある。(委員長代理)

・里山イニシアティブの提案を作っていく過程でも、国連大学が科学的側面からの位置づけを与え、政府と国連大学が共同し、COP10 で一緒に説明した。里山イニシアティブのパートナーシップも正式に立ち上がり、COP10 の課題についてさまざまなアドバイスや協力をいただいた。(環境省)

○海外との連携を図る窓口としての役割の必要性について意見があった。

・海外の先住民族グループと日本の NGO で、CEPA に関する共同声明を行った。こういう海外との連携を図る際の窓口としても、この委員会が機能してほしい。

○世代を越えた取組との連携についても、次のような意見があった。

・愛知と名古屋の活動である子ども COP10 の中学生から「子ども CEPA 委員会をつくりたい。そして大人の委員会と連携したい」という熱いメッセージをいただいた。市民セクターとしてはこれを推進したいと考えているので、世代を越えた取組と委員会が連携できるといい。

○自治体の役割の重要性について委員長代理より意見があり、それに対し自治体からの意見があった。

・自治体が懸命に取り組むことがかなり重要。小さな市町が特有の生物を対象にして地域住民と共に、懸命に取り組む動きが全国に散見されてきた。今後、自治体がどう取り組むかも本委員会に重要なことである。

(委員長代理)

- ・クロージングイベントに際して、国際生物多様性年は1年で終わるが、生物多様性の取組をクローズさせてはいけないということを肝に銘じてやってきた。新しく里山創生室という専属組織を設け、国連の10年に向けて積極的に取り組む体制をつくっている。地元での里山保全という活動を通じて県民の理解や認知の向上を進めていくとともに、国際会議を開催したという自信をもって、国際的な貢献ができればいいと考えている。
- ・自治体の首長の中にも、まだ生物多様性という言葉すら知らない人がいる。地域戦略をつくるように丁寧に呼びかけていくべき。県レベルよりも全国で市レベルのうねりができるといいと思う。

○モチベーションを保ち続けていくために国際会議の誘致についての提案があった。

- ・日本で COP10 が盛り上がったのは日本で国際会議が開催されたから。2020年までのモチベーションを考えると、個人的な提案だが、4年に1回開催される IUCN の世界自然保護会議を日本で開催できれば、モチベーションも保てるのではないか。
- ・世界自然保護会議が来年開かれる韓国では、国を挙げて誘致を行った。日本でやる場合、世論が起きることが必要。本気であらゆるチャンスを使って盛り上げる必要がある。

○経済界の参加の重要性についても次のような意見があった。

- ・生物多様性の主流化は、それぞれの国益や地域益に議論が巻き込まれるなど、経済の問題も深い関わりがある。民間参画パートナーシップに450社が集まろうとしており、これも重要な取組である。経済界ともこの議論をすべき。エコロジーとエコノミーは切っても切れず、経済界に議論に参加していただくことが重要である。

(委員長代理)

○上記の意見交換の後、本日の議題について委員一同の了解を得た。

## ■松本環境大臣あいさつ

- ・COP10 は厳しい交渉であり、マスコミは先進国と途上国が対立をしていると報道していたが、我々は必ずどこかに共通の地球益、人類益があることを信じ、皆様方の大きな支えで成功に導くことができた。皆様方の熱意と高い志があったればこそ、愛知目標、名古屋議定書ができた。国際生物多様性年クロージングイベントでも石川県・金沢市には大変お世話になった。
- ・生物多様性と同時に気候変動も大きな課題になってきており、メキシコ・カンクンの COP16 も大変な交渉であったが、議長がしっかりとまとめ、我々もサポートしてきた。これからも皆様とともに地球を豊かにし、生物多様性の損失を止めていきながら、未来の子どもたちからの預かり物である地球をしっかりと守っていかうという決意を共有し、取組を進めていきたい。皆様に支えていただき、また、生物多様性を盛り上げていただいて今があるということを心から感謝申し上げたい。